

このように町史を通して過去をふり返ってみると、それは結局現在を愛し、将来に希望をかけるということになる。われわれは、このささやかなまちに どうしてわれわれの先祖が住みついたか、どのようにしてこのまちを愛し、肩を寄せ合つて生きてきたかを見てきた。そのことを知るときこのまちに生きることを決め、現にここに生活しているものは、より助け合つて、よりよいまちにし、幸福な毎日を築き上げてゆくより他に途がないことが改めて考えさせられる。この意味で、わがまちは、ここに住む多くの人々の運命共同体であり、生活共同体である。

その昔何かの機縁でここに住みついたむら人も、合併したまちの人も、移り変わる時代の変遷の中で時代に支配され、時には苦しみを受け、時には嘆き悲しみに耐えて生きて来た。貧しいとき、苦しい事もあったが、みなよくそれに耐えて今日までの生活を築いてきた。とくに合併して近代的な町となつたこの二〇年は、国の助成と補助によつて、他の町村なみのなすべきことをし、作るべきものを造つてきた。その二〇年間は日本経済の高度成長時代でもあり、設備投資時代でもあつた。そして、国や県がせよということはし、他の町村にあつてなきものは補い、外観的には全く見違えるような近代的な町となつた。しかし、こうしていま改めて考えてみると、それはいわば「右へ並え」時代であり、一般の町村の「おつけあい」行政時代でもあつたといえる。

しかし、これからはよく過去をふり返り、現実を見つめ、とくに利用されないでいる町の資源を皆で活用

びし、但東町独特のものを生み出し、独特の産業を起し、「まち」としての独特の存在理由を発揮すべきではなからうか。他所のものを真似、おつけ合いの増産をして、例えまとめて売れば一つの産物となつても、その中で自ら他との競争に打克つことのできる「独特のもの」をこれから皆で力を合わせて生み出してゆかないと、将来はよりよく生きてゆくことはできないであろうし、真の町の発展にはならない。この巻を閉じ目を伏せるところに生まれ、ここに死に、ここを出ていった人々も、ここに生活してここに帰ってきた人々も、皆この町に住む人がより幸福になることを心から願っていると思えるし、そうしなければならぬといえる。それがこの町史の結びである。

# 付録



(公開された主な図書)

## 付録説明

- 一、神社 延喜式内五社と、もと県社あわせ七社のみとした。  
すべて「兵庫県神社誌」（昭和一三年）下巻から転載した。
- 二、寺院 合橋「寺院明細帳」から全文転載した。  
高橋 委員による執筆をそのまま登載した。  
資母「資母村誌」寺院編から一部分を転載した。
- 三、文化財 国・県指定三件は本文その他に記載した。  
町指定は、あたかも本年三月第一回指定告示されたので、そのまま登載した。
- 四、年表 本文に登載できなかった事項を重点として、作成した。
  - 1、ひとつの事項を記述しても数ページになるものもあり、紙数上ここに集約した。したがって一般の年表とは趣を異にしている。
- 五、文献 2、「総合年表」や「町制二〇年表」は、別の機会に作成が望ましい。  
とくに宮田委員引用の主要なものに、他委員のを若干つけ加えた  
が、これ以外に多数引用されていることはいうまでもない。

一、神社

縣社 佐々伎神社

鎮座地 合橋村佐々木字宮本

〔特選神名牒〕 佐々木村字宮本 (出石郡合橋村大字佐々木)

〔神祇志料〕 今佐々木庄佐々木村に在り

祭神 少彦名命 ○調書二ハ大彦命ヲモ記ス

由緒

(イ) 總説

崇神天皇十一年道主命、比奈良岐と計り北國開發の祖は少彦名命、大國主命を祀る社を創立せしに創まると傳ふ國司文書には桓武天皇延暦三年佐々貴山君波佐麻其祖を祀るといへるは同氏族の祖神を合せ祀りしものか延喜式の制小社に列し鎌倉時代法勝寺領として神田三町六反三百三十分を有し後世須留神社を合せ祀つて二宮大

明神と仰ぎ江戸時代貞享二年、寶曆二年社殿を

再建し文久二年又本殿を上棟せり明治六年十月

村社に列し大正十二年六月郷社に進み昭和四年

八月縣社に昇格せり

〔出石藩舊記〕

雀岐大明神

須流大明神

右二社ヲ一社ニ約メテ二宮大明神ト稱ス

七月十五日 祭例獻米五升

大崎大明神 八月十五日 祭例獻米五升

(ロ) 社名祭神

〔神社扁額〕

佐々伎神社

參考

(中畧)

〔神社考〕佐々伎神社 延喜式神名帖ニ載スル所ノ神社ニシ

テ今佐々木ニ坐ス所ノ祭神少彦名命沙々貴大神諸國鎮座記

曰但馬國沙々木神社少彦名命在出石郡國民大祭之必豊年也

宇賀宮也云々

和論語神明部曰少彦名命山城國五條天神近江國佐々木貴大社但馬國佐々伎宮是也右ノ書ニ載ル所ヲ見レバ世ニ著シキ神社ナリ古ヨリ此ノ地ノ婦人子ヲ産スマカなし此ノ神ノマモリナリト云傳フ此神醫藥之事ヲ教ヘ給フ神ナレバ其ノ靈驗アルモムベナリ凡神社諸國ノ鎮坐十六所ニシテ是其ノ一ナリ云々太田文ニ曰雀岐庄神田三町六反三百三十分トアルハ右ニ社ノ神領ナリシナルベシトアリ

〔但馬考〕佐々伎神社 延喜式ニアリ小社ナリ今佐々木ニイマスハ二宮大明神大崎大明神ニ社ナリ何レ古祠ナルコトヲ知ラズ 但馬式社考曰土人二宮大明神ト稱ス池臣曰佐々木村鎮座佐々木大明神ト云フ 神名帳考證曰祭神大彥命命ハ孝元天皇ノ長子ナリ伴信友曰近江國抄姓氏録ニ佐々貴君ハ阿部朝臣同祖大彥命ノ後也書紀孝元紀ウチシコナ二爵色謎命ヲ立テ皇太后トナシ大彥命ヲ生ム是レ佐々貴君等凡七族ノ始祖也 池臣曰姓氏録左京皇別佐々貴山君アリ曰佐々貴山君ハ阿部朝臣同祖大彥命ノ後也攝津皇別亦然リ曰佐々貴山君ハ高橋臣阿部朝臣同祖大彥命ノ後也古事記ニモ佐々紀山君韓密ト云フ人アリ現今近江ニテ少彦名命仁德天皇敦實親王ヲ祭ルト云フハ當ラズ況ンヤ出石郡ニ高橋郷アリ大彥命ノ子孫ノ當

國ニアルハ據アリト云フベシ姓氏録ニ雀ノ朝臣アレド建内宿禰命之後也マガフベカラズ 神祇寶典曰近江國佐々木社ハ少彦名命仁德天皇垂跡ナリ但馬式社考曰和論語ニ少彦名命ハ山城國五條天神近江國佐々貴大社但馬國佐々伎宮是也ト

(ハ) 創 立

〔增補但馬一覽〕崇神天皇十一年夏四月壬子朔下向シ玉ヘバ郡盜恐レテ逃去リ異賊悉ク歸服シテ國國安寧也道主命比奈良岐談合シテ北國ハ大己貴命少彦名命等ノ開闢ノ功アリ殊ニ靈驗新ナレバ天皇ヘ奏シ天皇勅免有リテ靈神ノ社頭ヲ造當シ玉フ云云

〔國司文書〕人皇四拾五代勝寶感神聖武皇帝天平拾九年春三月以佐々貴山君大佐伎爲出石郡司高橋臣之族也云云

人皇五十代柏原天皇延曆三年夏六月以佐々貴山君波佐麻爲出石郡司佐々貴山君波佐麻祀其祖佐

々貴山君於射坂丘々云

(以下省畧)

縣 社 大生部兵主神社

オホイクベヒヤウズ

鎮座地 高橋村藥王寺字宮内

〔國司文書〕 高橋郷大生部村

〔但馬秘鍵抄〕 大生部里

〔出石郡郷名記〕 在焉大生部在住之地

〔但馬國神社鑑〕 大生部村鎮座

〔但馬神社重寶記〕 高橋庄藥王寺村

祭 神 健速須佐之男命

由 緒

(イ)總 説

傳へいふ用明天皇の皇子麻呂子親王勅を奉じて丹後竹野郷なる兇賊討伐の爲め當村江笠嶽鎮座の午頭天王に十七日參籠祈願せられ生木の杉を以て神像を調刻せられ其後神社の西方十數町の地に親王を葬り其の塚今に存すとあれば其頃よ

り前に創立せられしものか或はいふ國司文書に天武天皇十二年社地を移し齋祀することあれば其の前後の事か文徳天皇の齊衡元年神教に依りて現今の地に遷座し清和天皇貞觀年中社殿を造營す村上天皇康保元年當國の國司神徳顯著なる旨を奏聞せしかば大宮吉光勅使として參向し田地四町六反餘を社領として寄進せらるといふ降つて治安元年八月二十五日平光守勅使として參向し源頼光は丹波の鬼賊退治の際武運長久を當社に祈つて刀を奉納す中古以來藥王寺別當として支配せり次いで國司山名入道常禰は勅使大宮吉光寄進の社領地を別當禰宜社僧等の恣に賣却せるを咎め永享元年家老垣屋越前守に命じて其の地を買得還付せり天正十八年社領を沒收せられ高札も亦撤去せられたりしも次いで領主小出吉重は寛文五年祭禮及び當社に關係深き牛馬市に惡徒の狼籍を停めて制札を掲げたり翌六年小

出吉重は高三石五斗餘を寄進し小出英安は貞享

五年本殿再建の用材を奉納せり領主寶永六年松

平忠固は神樂殿再建に又用材を寄進し天保元年

神樂殿再建には藩主仙石家の寄進ありたり明治

六年十月村社に列し同十六年十一月社名大生部

神社を大生部兵主神社と改稱し大正五年九月郷

社に進み同十五年九月縣社に昇格せり(中畧)

(太田文)大生部兵主神社 嘉祥四年正月廿一日

詔天下諸神不論有位無位共叙正六位上於此大生

部兵主神社預給此榮後宇多院天皇御宇弘安年中

以神德顯特被進從三位

(同)社名祭神

(但馬國神社鑑)大生部兵主神社 祭神素盞鳴命

(但馬神社重寶記)大生部兵主大明神 祭神素盞

鳴命

(出石郡古事記)式内社大生部兵主神社 祭神素

盞鳴尊(但馬國神社灯明記)

大生部

兵主神社

祭神素盞鳴尊

(神社明細帳)大生部兵主神社 明治十六年十一

月八日社號更生

(イ)創 立

(國司文書)大生部大兵主神社 祭神素盞鳴命武

雷命齋主命甘美真手命天忍日命 人皇四十四代天

武天皇十二年冬十月出石郡司三宅連神床陣法博

士大生部了等勸請之十二年冬十月三宅吉士神床

賜姓連先是夏閏四月三宅吉士神床奉勅集子弟豪

族具兵馬器械招陣法博士大生部了講習武事且設

兵庫於高橋邑以藏兵器大生部了祀大生部兵主神

於兵庫測 大兵主神者素盞鳴尊武甕槌命經 十三年冬十

二月三宅連神床賜姓宿禰

人皇四十一代持統天皇己丑秋七月三宅宿禰神床

率陣法博士大生部了至養父郡更杵村召集一國之

壯丁四分一講習武事設其地於兵庫又祀大兵主神

云之更杵村大兵主神社三宅宿禰神床之子博床止

更杵村與大生部了之子廣掌軍事又爲造兵器召楯

縫吉彦令作楯楯縫吉彦祀其祖彦狹知命於兵庫側  
云之植縫神社博床之子孫云系井連也

〔但馬秘鍵抄〕陳法博士大生部了食封之地也故名  
大生部天淳中原湍真人天皇御宇十二年夏閏四月

三宅宿禰奉勅聘陣法博士大生部了具兵馬器械講  
武事且建兵庫藏兵器大生部了祭兵主神謂之大生

部大兵主神社 (以下省略)

村 社 比 遲 神 社

鎮座地 資母村口藤字山姥

〔特選神名牒〕 口藤ヶ森村字山姥 (出石郡資母村大字  
口藤ヶ森)

〔神祇志料〕 今丹後但馬の界比治山の麓藤が森村  
にあり

祭 神 多遲摩比泥神 \* 天津兒屋根神

由 緒 創立年月不詳なれども延喜式の制小社に列  
し明治元年社殿を再建せり同六年十月村社に列

同四十二年春日神社を合祀せり

〔延喜式卷十神名式下〕

但馬國一百卅一座 大十八座  
小一百十三座

出石郡廿三座 大九座  
小十四座

比遲神社

〔特選神名牒〕 比遲神社

祭神 豊宇加之賣神

〔神祇志料〕比遲神社 山姥稻荷と云神社明細帳  
流倍〇按藤

神社道志森の轉 森は比治訛也 盖豊宇迦乃賣神を祭る初豊宇加乃

賣神常に攝津稻椋山に居て厨膳を爲り給ひしが

後故ありて丹波國比遲の麻奈韋に還り給ふ攝津  
土記

風 即是也

〔神社調書〕明治元年辰八月再建 明治四十一年

九月同村無格社春日神社合祀の義許可同四十二

年五月廿四日合祀濟

〔神饌幣帛料供進神社指定年月〕大正四年十月二

十五日



境内 三百二坪 官有地

營造物 本殿 萱葺入母屋造四坪

幣殿 瓦葺入母屋造六坪

拜殿 萱葺入母屋造四坪二合二勺 ○調書ニハナシ

境内神社 稻荷神社(保食神)

祭日 例祭 十月一日

〔神祇志料〕凡其祭八月 日を用ふ 豊岡縣式社取調帳

寶物及貴重品

一本殿棟札 享和元年建立カ

氏子 五十戸

村社 阿牟加神社

鎮座地 資母村虫生字宮ノ宮

〔特選神名牒〕虫生字宮 ノノ森 (出石郡資母村大字虫生)

〔神社志料〕今虫生村にあり

祭神 天穗日神 不詳(上宮神社) 事解男神

大日靈貴神

由緒 創立年月不詳なれども延喜式の制小社に列

し享保十六年本殿を再建せり明治六年十月村社に列し同四十二年上宮、神明の兩神社を合祀せり

〔神社調書〕享保十六年九月再建明治四十二年五月二十六日合祀濟

〔延喜式 卷十 神名式下〕

但馬國一百卅一座 大十八座 小二百十三座

出石郡廿三座 大九座 小十四座

阿牟加神社

〔特選神名牒〕阿牟加神社

祭神 天穗日命

今按式帳丹波國天田郡奄我神社も祭神天穗日命にて聖明神と云ふもの互に證とすべし

所在 今按式社道志流倍に諸帳面に森尾村にありと云るは誤れりされどそれも同神を祭れるに字あむか峠と云あり虫生村には古き鰯口あり

裏銘に阿牟加神社とあり又あむか側あむか杉な  
ど字に残れりと云り附て考に備ふ

〔神祇志料〕阿牟加神社 聖大明神といふ ○中略蓋

天穗日命を祀る 新撰姓氏録土人傳説○按丹波國天田  
聖大明神と云ひて祭神又同じきもの

郡奄我神社も  
證とすべし

境内 四百八十六坪 官有地

營造物 本殿 柿葺流造一坪

本殿覆 四坪

境内神社 稻荷神社(保食神)

祭日 例祭 十月十六日

〔神社調書〕さ、ばやしと云ふ行事ありて氏子の

内にて十四五歳迄の男子二人宛して太鼓を打ち

つつ進行後列引き續いて各戸主全部御幣を持ち

て進み太鼓持太鼓を打ちならしつ、公会堂よ

り出發神社前迄練り込み参拜するの習慣にして

毎年氏子各戸より子供等交替にて奉仕

〔神祇志料〕凡六月十六日祭を行ふ 豊岡縣神  
社取調帳

寶物及貴重品

一本殿再建棟札享保十六年

氏子 八十五戸

村社 ヒノデ 日出神社

鎮座地 資母村畑山字本小林

〔特選神名牒〕(村明神鎮畑山にあり) (出石郡資母村大字畑山)

〔神祇志料〕今畑山村にあり

祭神 日多訶神

由緒 創立年月不詳なれども延喜式の制小社に列

し享保十一年拜殿を建立し寶永元年社殿を修復

せり明治三年社殿を現在地に移し同六年十月村

社に列せらる同二十一年遷宮を奉仕せるは社殿

修繕の爲めなり

〔延喜式卷十  
神名式下〕

但馬國一百卅一座 大十八座  
小一百十三座

出石郡廿三座 大九座  
小十四座

日出神社

〔特選神名牒〕 日出神社

祭神 多遲摩比泥改正

今按社傳に多遲摩比多訶を祭ると云へども日出と比泥と昔相近く社地の字を日殿と云も比泥に由あれば今之を訂せり

所在 今按式社道志流倍に畑山村日出大明神あり畑山の内に宮本と云所あり又日向村日和坂村日落谷など云所ありされば畑山村なるは式社なり南尾村栃森明神と云はいかがあらんと云へり尚よく考ふべし

〔神祇志料〕日出神社 日出大明神といふ神社明社道志

細帳神蓋母呂須玖の子多遲摩斐泥を祭る日本書紀 事記延喜

古式

〔棟札寫〕日指大明神奉建立御拜享保十一年丙午天

八月十一日守護小出主膳様御代官彌兵衛御手代大村茂兵衛宮本氏子中大工平井九左衛門永井文

境

左衛門加藤仁平(裏)日指大明神奉建立御拜子孫繁昌祈處 日指大明神寶永元年申之四月十一日守護小出主膳御代官小出彌兵衛伊藤又左衛門御手代坪内茂兵衛大工宇須井源右衛門(裏)當社及破損氏子中茂すいび仕可致力無之節操仕□百日計り御座候て皿之木引手間へまいりやしないに仕色々と精を出し如此之破損いたし候以後如此可有者也寶永元年申四月十一日但馬國出石郡太田谷畑山村宮本筆取羽尻平左衛門 奉遷日出神社明治三年庚午九月四日(裏)村中安全畑山村庄屋永井和乎年寄今井幸左衛門同苗淺右衛門百姓代永井三郎左衛門丹後久美谷神社大宮司佐治從五位藤原朝臣正□敬拜 奉宮繕日出神社御神殿一字一天泰平社頭光榮今上天皇寶祚萬年祠掌黒田廣照御遷宮明治二十一年十月十五日同村總代永井三郎左衛門

内 二百六十六坪 官有地

營造物 本殿 柿葺流造三坪

本殿覆 九坪

境内神社 稻荷神社(保食神)

祭日 例祭 十月十三日

〔神祇志料〕凡其祭九月十三日を用ふ  
神社明細帳

寶物及貴重品

一 御拜建立棟札 享保十一年 一枚

一本殿再建棟札 寶永元年 一枚

氏子 三十戸

村社 須流神社スル

鎮座地 資母村赤花字主樓谷

〔特選神名牒〕 赤花村字主樓谷(出石郡資母村大字赤花)

〔神祇志料〕 今赤花村字主樓谷にあり

祭神 伊弉諾尊 伊弉冊尊

由緒 創立年月不詳なれども延喜式の制小社に列

し正徳二年本殿を建立し文化十四年同殿を再建

す明治六年十月村社に列せらる

〔延喜式卷十神名式下〕

但馬國一百卅一座 大十八座 小一百十三座

出石郡廿三座 大九座 小十四座

須流神社

〔特選神名牒〕 須流神社

祭神 稱主樓明神

〔神祇志料〕須流神社 主樓明神といふ 神社道志式社取調

流倍書

〔棟札寫〕奉建立主樓大明神村中息災五穀成就願

攸正徳二壬辰年九月吉祥日大工兩村李兵衛 當宮

再造遷宮棟札赤花村氏子中奉再建主樓大明神宮

壹宇大工棟梁岡田小兵衛文化十四歳九月二十六

日本願主口赤花橋本八兵衛中西吉左衛門中赤花

渡邊猶右衛門奥赤花小西六郎右衛門

〔神饌幣帛料供進神社指定年月〕大正四年十月二

十五日

〔神社明細帳〕拜殿新築大正五年十二月二十四日

境内 七百三十七坪 官有地

營造物 本殿 萱葺入母屋造四坪

本殿覆 四坪

拜殿 萱葺入母屋造六坪

境内神社 武神社(不詳) 稻荷神社(保食神)

祭日 例祭 十月十一日

寶物及貴重品

一本殿建立棟札 正徳二年 一枚

一本殿再造棟札 文化十四年 一枚

氏子 百四十五戸

村社 手谷神社

鎮座地 合橋村河本字宮谷

〔出石郡神社系譜傳〕 出石郡手谷村

〔但馬神社重寶記〕 佐々木庄河本村

〔但馬國神社燈明記〕 高橋郷高橋在

〔特選神名牒〕 河本村字岡(出石郡合橋村大字河本)

〔神社志料〕 今天谷河本村にあり

祭神 壇安神 ○調書ニハ宇賀御魂  
神大彦命ヲモ記ス

由緒

(イ)總説

文武天皇四年の創立と傳へ元天谷村に垂跡せられしかば天谷神社と稱すべきを中古洪水の爲め流されて其止まりし處に宮殿を造營するに至り手谷と改稱すと云ふ又神名は稻倉魂命の頭字を取りて宇賀大明神と稱し亦同神を豊岡毘賣命と云ふを以て岡宮或は岡大明神とも稱せり延喜式の制小社に列し文化十四年本殿を修復し明治六年十月村社に列せらる

(ロ)社名祭神

〔出石郡神社系譜傳〕手谷神社 祭神 大彦命

〔但馬國神社燈明記〕手谷神社 祭神 大彦命

異 説

〔但馬神社重寶記〕手谷大明神 祭神 高橋臣之祖大彥命

ハ) 創 立

〔國司文書〕手谷者丘名也 祀高橋臣之祖大彥命

奉禰之手谷神社

〔但馬故事記〕人皇四十二代文武天皇庚子四年秋

十月以考元天皇之皇子大彥命之裔高橋臣義成爲

出石郡司高橋臣義成祀大彥命於手谷丘稱手谷神

社

〔但馬秘鍵抄〕高橋郷 高橋臣義成食封之地故名

高橋

高橋本郷 高橋臣住于此地天真宗豐祖父天皇御

宇庚子四年十月出石郡大領正八位下高橋臣義成

祀其祀大彥命於手谷丘謂之手谷神社

〔但馬世繼記〕高橋郷 高橋所謂處高橋臣此地二

住故負名也手谷ノ里 手谷者丘名也高橋臣在此

祀其祖大彥命於手谷丘謂之手谷神社

(二) 沿 革

〔延喜式神名式下〕

但馬國一百卅一座 大十八座 小一百十三座

出石郡廿三座 大九座 小十四座

手谷神社

〔特選神名牒〕 手谷神社

祭神 埴安神

〔神祇志料〕手谷神社 宇賀明神といふ神社明細社道志流

帳神

〔本殿修復棟札〕○文化十 四年

奉修復棟上宇賀大明神社 本願別當 本澤寺

文化十四年丁十一月十二日 現主 寂舜

大工渡銀札四百五十奴小挽百三十二但シ寺養之

棟上八拾貳二面寺かまひ○外略

〔神饌幣帛料供進神社指定年月〕大正四年十月二

十六日

境 内 二百九十七坪 ○調書二ハ二百九十三坪ト記ス 官有地

營造物 本殿 柿葺流造六坪

本殿覆 六坪

拜殿 柿葺入母屋造三坪

境内神社 松尾神社(大己貴尊) 稻荷神社(保食神)

祭日 例祭 十月十二日

寶物及貴重品

一本殿修復棟札 文化十四年

一鏡

一面

一枚

氏子 百二十戸

二、寺院

東覺寺 (畑)

眞言宗 高野派 (正智院末)

本尊 聖觀音

由緒 長享年中創建 光尊開基

本堂 方六間三尺

庫裡 桁行六間三尺 梁行五間

鐘樓堂 方九尺七寸

境内地 三百三十四坪 官有地第四種

檀徒 四百十三人

境内佛堂 一字

庚申堂

本尊 青面金剛

由緒 不詳

建物 方一間

本澤寺 (河本)

眞言宗 高野派 (正智院末)

本尊 阿彌陀佛

由緒 不詳

堂宇 桁行十間三尺 梁行五間三尺

經藏 方一間三尺

鐘樓堂 方一間三尺

境内地 二百廿三坪 官有地第四種

檀徒 二百六人

桂昌寺 (西谷)

臨濟宗 妙心寺派 (妙心寺末)

本尊 釈迦

由緒 開基諸溪 永享六<sup>甲</sup>寅年四月創建

堂宇 桁行五間三尺 梁行四間三尺

鐘樓堂 方一間三尺

境内地 百七十四坪 民有地第一種 各受人  
久保香巖

檀徒 百九十四人

如意寺 (天谷)

曹洞宗 (吉祥寺末)

本尊 十一面觀音

由緒 開山祐山創立 慶長元<sup>丙</sup>申年三月

本堂 桁行六間 梁行五間

境内地 百七十六坪 官有地第四種

檀徒 百三十三人

境内佛堂 二字

藥師堂

本尊 藥師

由緒 不詳

建物 方二間

地藏堂

本尊 地藏

由緒 不詳

建物 方三尺

東光寺 (佐々木)

眞宗 本願寺派 (本願寺末)

本尊 阿彌陀仏

由緒 創立元祿二<sup>己</sup>巳七月開基存久

堂宇 桁行九間 梁行四間三尺

境内地 百五十九坪 内五十坪  
百九坪 官有地第四種  
民有地第一種東

井隆法私有



檀徒 四十二人

安国寺 (相田)

臨濟宗 大徳寺派 (大徳寺末)

本尊 釈迦

由緒 不詳

本堂 桁行五間半 梁行七間

庫裡 桁行二間半 梁行三間半

境内地 二百五十四坪 官有地第四種

檀徒 三百九十七人

境内佛堂 一字

庚申堂

本尊 青面金剛

由緒 文政五年創建

建物 明治三十六年五月廿四日類焼

放光山専福寺 (平田)

往古は粟谷口香積寺と号し、中途休房し寛文宝

永(二六—七〇)のころ若僧住し永領寺より通円来

り、粟谷口旧地に建立し専福寺と稱した。宝永期

に貞山師を円了寺より迎え、宝歴一二年(二七—二

一)実の時代から佛教一切経を所蔵した。

安政六年(二五)第六世大蟲法師は長男得生に住

職を譲り、六〇才で薩摩開教に三年従事し六四才

の七月本願寺の命を受け北海道開教に聞名法師を

同行し、函館と小樽に寺を建て六六才にて函館の

地にその生涯を閉じた。

石室山 松禪寺 (栗尾)

天文年間(四四〇年前) 来翁祖諱和尚の開基に

して、天寧寺派にして寛文三年山頂より現在地に

移転す。その後一一世陽岩惠春和尚のとき、嘉永

五年、妙心寺派となり、現在一五世、英洲瑞峯和

尚となる。

本 尊 地蔵菩薩

鐘の銘に曰く

高樓新立嚴整禪叢

前住妙心現任天寧萬休叟誌

敲苗昏月鳴明燒風煩惱

守寺宗標首座

夢破菩提心通萬靈佛

平安城住大椽藤原氏次作

慶衆若圓融滿耳功德在

寛文三龍集癸卯小春朔日

不聞中洪音不竭壽同

当所 理左衛門  
源左衛門

式空

松谷山 光蓮寺 (久畑)

創立木端法師の開基にして眞言宗である。古時、

後村に在り、貞享四丁丙九月久畑市場村へ移転し、

説導に奉仕す。のち眞宗となる。初めて寺号本佛

を本寺(出石福成寺)より免許、光蓮寺開山とす。

明治四年三月出石藩の命により小坂の眞宗乗專寺

と合併せしめられ、同年七月離れて復旧し現在に

至る。

竜峰山 乘專寺 (小坂)

正應二己丑年七月(六八五年前)乗專と申す僧、

天台宗の僧にて親鸞聖人の弟子となり、法名乗專

を許されたが、聖人の歿後、故郷へ歸り(現在福

知山市長田野の生れと伝ふ)草菴を建立す。その

後火災により焼失し、貞享三年九月本堂再建す。

棟札に小出備前守代官林浅右衛門等の記名あり。

本 尊 阿弥陀佛立像 (延寶七曆末)

眞 宗 本願寺派

境内地 二九七坪

檀 家 百一戸

笛岡山 楽音寺 (大河内)

古文書及

宝永三年久畑村差出帳による。

「但馬考」。

記録が乏しく、寺暦は明らかでないが、大河内に、隣接の薬王寺部落の鎮守兵主神社に六つの坊があり、当時もその一坊だったといわれている。その荒廃していたのを三六六年前の文録四年五月、便喜善方首座が復興して曹洞宗に改めた。

その後吟海善龍首座から安山広禪首座に傳へ、出石町吉祥寺を本寺とし同寺三世祐山和尚を勧請して開山とした。二世天宗和尚のとき平僧地から法地に昇格し中興となつたが、当寺の最功勞者である九世本秀和尚は、正法眼藏の研究家として知られ、眼藏注釈書はその寺宝として保存されている。また本秀和尚は仏具を調達し境内を整備するなど多くの足跡を残した。本堂の屋根替え・山門納屋の改築は前任透嶺和尚のとき完工した。

檀家 百二十五戸

瑞雲山 金 藏 寺 (中山)

臨濟宗 妙心寺派

本 尊 聖觀音

由 緒 不詳

堂 宇 桁行十間三尺 梁行五間三尺

鐘樓堂 方一間

寺務所 桁行五間 梁行三間

宝 藏 方二間

境内地 百四十三坪 官有地第四種

境内佛堂 一字

鎮守堂 本尊 荒神

由緒 不詳

建物 方一間

檀徒 十七人

天徳山 藏 雲 寺 (中山)

臨濟宗 大徳寺派

寺 格 一等地

本尊 釈迦佛 脇土文殊 普賢

由緒 開山普明嘉慶元年創立

本堂 桁行六間三尺 梁行五間三尺

庫裏 桁行六間 梁行四間

鐘樓堂 方一間三尺

境内地 四百六十二坪 官有地第四種

檀徒 千三百五十人

境内佛堂 一字 觀音堂

本尊 觀音

由緒 不詳

建物 方二間

宝珠山 玉宗寺 (中藤)

曹洞宗 永平寺派 吉祥寺末

本尊 聖觀音

由緒 不詳

本堂 桁行五間三尺 梁行四間三尺

庫裏 桁行七間三尺 梁行四間

鐘樓堂 方一間

土藏 桁行二間半 梁行二間

廊下 桁行二間 梁行二間

境内地 二百八十八坪内七十七坪官有地第四種 二百一十一坪官有地第一種

檀徒 六百七十二人

境内 佛堂一字

禪堂 本尊 如意輪觀音

由緒 不詳

建物 桁行三間 梁行三間三尺

円融山 法華寺 (赤花)

日蓮宗 妙顯寺末

寺格 乙六等紫金欄跡

本尊 釈迦佛 中央 南無妙法蓮華經本尊眞前に日蓮聖人を奉祀す

由緒 創立元和四年 中興 宝歴十二年四月

堂宇 桁行七間三尺 梁行五間四尺

境内地 四百三十七坪 官有地第四種  
 位牌堂 桁行一間七分五厘 梁行二間  
 廊 下 桁行五尺 梁行二間  
 檀 徒 四百六十五人

三、但東町指定文化財

但教告示二号 (写)

但東町指定文化財の告示について

但東町指定文化財を指定するにあたり、但東町文化財保護に関する条例第三条四項の規定により下記の通り縦覧に供します。

昭和五十一年三月五日

但東町教育委員会

種別	名	称	品質	作	者	年	代	員	数	保	持	者
〃	達	磨	像	〃	軸	明	兆	室	町	1	1	中山藏雲寺

〃	古文書	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	仏像	〃	絵画
関わらぬ	「太田文」写	阿弥陀如来(座)	朽木仏像群	十一面觀世音菩薩(立)	千体仏	十一面觀世音菩薩(立)	地藏菩薩(立)	四天王像(立) <small>多聞天王 增長天王</small>	聖觀世音菩薩(立)	阿弥陀如来(座)	十一面觀世音菩薩(立)	如意輪觀世音菩薩(座)	阿弥陀如来(座像)	布袋像贊	達磨像	
係地域裁許文書状		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	木彫	〃	軸	
														松花堂・沢庵	白隠	
江戸・二七五		〃	平安		江戸		〃	平安	室町	〃	〃	〃	平安	〃	江戸	
	1	1		1	1,000	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	
西野々部落	中山堀 英哉	久畑 阿弥陀庵	水石〃		中山藏雲寺		〃	栗尾松禪寺	〃	中山藏雲寺	中山金藏寺	中藤玉宗寺	中山渋谷孫兵衛	赤花松本重幸	中山藏雲寺	

建造物	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	石造物	〃	古文書
今井敏郎氏宅	地境争犠牲者供養碑	〃	〃	〃	〃	〃	庚申塔	山本家墓碑	逆修塔	宝篋印塔	(経転輪塚)	断碑	笠塔婆	山名文書(時熙)	天正八年「検地帳」写
〃	江戸	一八〇六					一七九七	一六四一 一六七五	一五六七	南三六 北四朝	江戸	一四四三	鎌倉	室町	
	1	1	1	1	1	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1
畑山 今井敏郎	〃	赤花	大河内	久畑	佐田	佐々木	河本部落	谷虫生	中山金藏山	佐々木部落	出合市場部落	中山藏雲寺	中山金藏寺	薬王寺大月武司	赤花但東町民俗資料館

〃	〃	天然 物記	〃	土 器	〃	〃	〃	古 墳	〃	〃	〃	〃	〃	史 跡	建 造 物
説 法 杉	千 本 杉	一 宮 樺 群 生 林	祝 部 古 墳 土 器	壺	栗 尾 〃	佐 田 〃	赤 坂 〃	奥 藤 古 墳	大 岡 畔 ・ わ ら 谷	久 畑 関 所 跡	金 藏 山	安 国 寺 跡	御 池 (恒 良 親 王 謫 居 跡)	亀 ヶ 城 (仏 性 ・ 岩 吹)	天 主 社 本 殿 ・ 拝 殿
				弥 生					〃	江 戸		〃	南 北	鎌 倉 ・ 南 北	江 戸
				1	1	1	1	1							
中 山 藏 雲 寺	高 龍 寺 産 霊 神 社	久 畑 ・ 佐 田 部 落	赤 花 俣 東 町 民 俗 資 料 館	薬 王 寺 天 王 社		佐 田 大 西 綱 藏	畑 井 上 一 実	奥 藤 佐 古 幸 夫	西 野 々	久 畑 浅 田 利 夫	中 山 金 藏 寺	相 田 前 田 修	畑 山 今 出 敏 男	太 田 上 田 嘉 一 郎	薬 王 寺 天 王 社



四、九〇年畧年表

西 紀	年 代	事 項
一八六七	慶 応 三	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 楽音寺に寺小屋を開設（笛岡黙庵）</li> <li>・ 平田村淀川藤三郎（のち改姓し淀）池田草庵の青谿書院に学ぶ</li> <li>・ 比遅神社再建</li> <li>・ 中山村今田太郎吉虫生村渋谷健次郎（のち資母村長渋谷謙三）池田草庵に学ぶ</li> </ul>
一八六八	慶 治 四	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高橋村に郷校久谿学館を開校</li> </ul>
一八六九	明 治 二	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 普通科、英語科などを授業</li> </ul>
一八七三	六	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中山虫生坂野で中山村今田長兵衛宅を仮校舎とし中山小学校設置</li> </ul>
一八七四	七	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 矢根小学校建築</li> </ul>
一八七五	八	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 御領中山私領中山の別を廃し合併</li> </ul>
一八七七	一〇	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 久畑村大火事午前九時から午後三時にいたる。約四〇戸（久畑全戸の半数）焼失</li> <li>・ 久畑大火災ほぼ復旧す</li> </ul>

民俗芸能	さき囃子（太古踊）					虫生 安牟加神社
々	山椒魚棲息地					坂野川上流
々	大師山巨石群					赤花 菅谷隣保
天然記念物	清 竜 滝					西谷部落

一八七八	明治一	・西南の役（西郷隆盛反乱）に赤花能勢秀吉、虫生山本秀吉ら熊本に従軍
一八七九	一二	・生野より出石・口矢根・中藤を経て宮津に達する路線、県道に編入
一八八一	一四	・口赤花村橋本正隆県会議員当選 ・福知山出石豊岡の新道路（登尾）測量開始 ・太田校新築に県令（県知事）森岡昌純出席、橋本竜一製糸場視察、橋本江笠宅に宿泊
一八八三	一六	・侍従高辻修長資母来村東里酒井與右衛門の善行と橋本竜一の功労を表彰し今井甚兵衛宅泊
一八八六	一九	・六月戸長役場設置矢根村他二三ヶ村（寺坂村を含む）所管す ・六月戸長役場設置栗尾村他一〇ヶ村（佐々木村含む）所管す
一八八七	二〇	・六月戸長役場設置中山村他一七ヶ村（三原村唐川村を含む）所管す ・六月栗尾村巡查派出所を廃し受持区を変更、久畑村に巡查宿泊所を設置 ・いなきばつる牛吉田号を桑垣駒太郎飼育す
一八八九	二二	・もと豊岡県第一第二第三大区各区长歴任の中山三郎死す五四才 ・合橋村となる（口矢根他一五ヶ村）初代村長兼議長大石藤兵衛 ・高橋村となる（久畑他九ヶ村）初代村長兼議長大橋安之助。第一回村会を光蓮寺で開会
一八九〇	二三	・資母村となる（中山他一五ヶ村）初代村長兼議長今井甚兵衛（雨香）乗馬で出勤す
一八九二	二五	・小谷村から栗尾へ道路完成 ・小坂峠第一回改修巾負九尺着手
一八九三	二六	・村会議員一級・二級に分ち半数改選（定員一二人）この年の合橋村予算額矢根校 ・唐川校相田校河本簡易校合計八〇七円九〇銭村歳入歳出各金九四三円八八銭六厘 ・矢根校に高等科（修業四ヶ年）設置予算二五八円この財源授業料一〇二円（生徒五一人一人月二〇銭一〇ヶ月分）村税一五六円（戸数割に賦課し寄付金あればこれを減額）
一八九四	二七	・天皇皇后両陛下結婚二五年式三月九日挙行につき、合橋村会金七円を奉祝会費とし議決

一九〇七	四〇	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高橋村各部落村に消防手押ポンプ購入</li> </ul>
一九〇三 一九〇五	三六 三八	<ul style="list-style-type: none"> <li>・口藤平野貞治新藤為藏虫生山本林藏開拓民として札幌に渡る</li> <li>・合橋村八月風水害三五五ヶ所中四六ヶ所三八、三九三元（県補助三三、五五四円寄付金残額）</li> </ul>
一九〇二	三五	<ul style="list-style-type: none"> <li>・久美浜福知山線（坂野中山畑山坂津經由）県道に編入</li> <li>・中山字神田に伝染病隔離病舎を建築</li> <li>・五月相田の火災一四戸に及び安国寺も類焼</li> <li>・この年合橋村歳入歳出予算三、七四九円一二銭二厘戸数七三四 人口三九七八</li> <li>・高橋にて日露戦争旅順開城を祝し積雪中各所にて祝賀会（会費一戸四銭）</li> <li>・太田村井上兵左衛門老衰辞世記念に後進子弟教育のため軍事公債証書金一〇〇円を資母基本財産に寄付。この年資母村八一七戸四、二〇七人</li> </ul>
一九〇〇	三三	<ul style="list-style-type: none"> <li>・播但鉄道（のち国鉄播但線）株式会社株券大河内村負担一〇円六九銭</li> <li>・中山加藤芳藏菓子製造を創業（雪花堂初代）</li> </ul>
一九〇二	三二	<ul style="list-style-type: none"> <li>・唐川字円城寺の里道五五〇間（約一〇〇〇坪）を四八一円二五銭で改修村補助二五円</li> </ul>
一九〇九	三二	<ul style="list-style-type: none"> <li>・久美浜尋常高等小学校開校式</li> <li>・資母村役場を新築（昭和二〇年まで執務）・縮緬功労者故渋谷伊右衛門を出石郡長山田豊吉追賞す</li> </ul>
一九〇六	二九	<ul style="list-style-type: none"> <li>・修道高等小学校新築</li> <li>・矢根校の高等科を合橋高等小学校として南尾に開設す決算額六五三元一四銭八厘</li> <li>・小畑源之助口藤に織布工場を設立、不振のため三五年閉鎖</li> <li>・南尾に巡査駐在所建築八三元九八銭八厘</li> </ul>
一九〇五	二八	<ul style="list-style-type: none"> <li>・河本校を二階造り間口六間奥行四間に改築予算一六〇円森脇平兵衛ほか一三二人より寄付金</li> <li>・修道小学校に高等科設置（資母尋常高等小学校の前身）・虫生山本卯造口藤山本用藏開拓民として北海道に渡る</li> </ul>

年	月	事 件
一九〇八	明治四一	<ul style="list-style-type: none"> <li>郡長より合橋の小学校四を一校とし相田唐川河本に分教場を置き相田分教場は第四学年まで唐川河本は第三学年案を示す</li> </ul>
一九〇九	四二	<ul style="list-style-type: none"> <li>中山今田禎次郎死す六〇才（もと村長県議五選、県会郡部会副議長）</li> </ul>
一九一〇	四三	<ul style="list-style-type: none"> <li>合橋村長より前年の郡長の学校統一案を村内平和のため現状維持答申</li> </ul>
一九一一	四四	<ul style="list-style-type: none"> <li>資母尋常高等小学校舎新築落成（昭和一〇年まで使用）</li> <li>合橋高等小学校を廃し矢根小学校に高等科併置</li> <li>赤花橋本江笠県会議員当選</li> </ul>
一九一三	大正二	<ul style="list-style-type: none"> <li>資母村第一回尚齒会開催（招待高令者七〇才以上二〇〇人）青年会主催す</li> </ul>
一九一四	三	<ul style="list-style-type: none"> <li>天谷里道前年より施工中一二月竣工郡補助五八九円</li> </ul>
一九一七	六	<ul style="list-style-type: none"> <li>二月福知山歩兵第二〇連隊の一部六二〇名（馬二三頭）雪中行軍し、平田栗尾佐田久畑薬王寺大河内に宿営す</li> <li>合橋村道路委員二名任期二年設置</li> </ul>
一九一八	七	<ul style="list-style-type: none"> <li>相田小谷里道六四三間完工第三期線七〇〇間測量 天谷県道編入不成</li> <li>四月出雲大社教千家尊愛管長、加悦町より来村渋谷喜兵衛宅泊翌日資母校講演し優等生高橋巖を表彰、</li> <li>三月中山豊岡間馬車開通（二頭立）</li> </ul>
一九二〇	九	<ul style="list-style-type: none"> <li>六月唐川火事四戸食料費等三一円八四銭郡より補助</li> <li>七月櫻井勉虫生口藤鬼子母神の史跡調査</li> <li>八月米価暴騰のため宮内省内務省他より六九〇円を受け一戸六二銭困難家庭に配分</li> <li>この年天谷県道頂上切下げ六〇尺（一八畝余）改修着手</li> <li>合橋村第一回国勢調査七二九戸三五四六八</li> <li>出合字山崎久畑間定期自動車開通</li> <li>第一〇師団機動演習將兵約二〇〇名赤坂矢根唐川に宿営</li> <li>この年合橋村内織物業一戸七台操業</li> <li>高橋村第一回国勢調査六三八戸二九六二人</li> <li>県道登尾峠改修期成会発会し基金として三町歩（杉松）植林を決定</li> <li>資母村第一回国勢調査八二二戸四〇七六八</li> </ul>

（注 合橋村）

年	月	日	事 件
一九二二	一〇		<ul style="list-style-type: none"> <li>● 九月出石中山岩屋間定期自動車開通</li> <li>● 一〇月県議選挙<sup>⑤</sup>関太平八二六<sup>⑥</sup>能勢兵次郎六七三</li> <li>● 五十五銀行中山支店開設（昭和三年但馬銀行に合併）</li> <li>● 有吉忠一兵庫県知事資母の道路織物業視察</li> <li>● 合橋村明治四〇年来の風水害被災五八万七〇〇〇円</li> <li>● 大河内にタービン式私設自家発電実施</li> </ul>
一九二三	一一		<ul style="list-style-type: none"> <li>● 石丸重美鉄道次官資母来村国鉄「山豊線」予定調査し赤花にて昼食離村</li> <li>● 八月の五日間大石武兵衛宅を借り郡農会主催醬油醸造講習会を開く。合橋三九人</li> <li>● 資母高橋より五人出席</li> <li>● この年合橋村織物七戸一三台年産①羽二重一五六六反②紹類五八八六反五八七三円③縞ほか八八三八〇円</li> <li>● いなきばつる牛国玉号中国六県共進会に出品（鳥取）</li> <li>● 郡道調査のため県議多数資母来村渋谷喜兵衛宅泊</li> <li>● この頃新嘗祭に宮中献納精米、大石武兵衛奉仕</li> <li>● 一月大雪 中藤字高来山申にて炭焼四名埋没凍死</li> <li>● 四月殖産精農家岩破勢吉郎（中藤）死す七九才</li> <li>● 明治四二年制定の「メートル度量衡法」実施猶予中のところ七月より実施され、各村当局その周知宣伝に努む</li> <li>● 一月東里火災住宅四戸付属六棟被害七〇〇〇円</li> <li>● 岩屋峠の改良着手翌年兵庫側完成</li> <li>● 高橋村役場・産業組合事務所落成式・鉄道省建設局山崎技官資母来村調査</li> <li>● 資母村会、中山四辻間及び出石局接続電話建設費七五八円八二銭を政府に支出を決議</li> <li>● この頃中山を如布赤野に分離す</li> <li>● 宮津銀行中山支店開業（のち丹和銀行となり戦後閉鎖）</li> <li>● 合橋村常設委員四名設置任期四年 多根綱太郎井上市右衛門大石武兵衛土方常造</li> <li>● 久畑小学校火災全焼のため役場を第一仮校舎旧役場を第二仮校舎別に第三校舎造成</li> </ul>
一九二七	一二		
一九二八	一五		

一九二九	昭和四	<ul style="list-style-type: none"> <li>●二月「普通選挙」第一回実施され、赤花橋本五雄（中立）第五区定員三名に、五人の立候補として競う。</li> <li>●資母村の御大典記念事業決定①村誌編纂②歴代村長真像撮影③富有柿苗を配付④学校林設置⑤村章制定⑥消防統一⑦村社へ銀杏植栽</li> <li>●この年合橋村の車輛、人力車一自転車四二五中車八七小車五雜車一水車九二荷自動車一</li> <li>●久畑校舎落成式</li> <li>●木戸孝允の子孫侯爵木戸忠太郎久畑へ來村、関所跡を視察し左句を読む。</li> <li>●薦紅葉 故公をしのぶ 関のあと</li> <li>●小坂峠第二回改修大正一三年着手のところ完工す</li> <li>●橋本江笠死す（もと村長泉議）六三才</li> <li>●前年継続工事村道合橋神美線矢根区間延長四二一間五尺巾二間を六三四八円六六錢で谷垣組施工決定</li> </ul>
一九三〇	五	<ul style="list-style-type: none"> <li>●三月「資母村誌」原稿完成。この年奥藤にてラジオを購入す</li> <li>●全但バス久畑小坂峠間定期開通昭和二七年八月廢止</li> <li>●明治維新の内閣顧問木戸孝允久畑関所記念碑除幕式を出石郡教育会主催で現地に、遺芳展示会を久畑校で行う。櫻井勉ほか來賓多数</li> <li>●今井甚兵衛（雨香）死す（初代村長三選泉議三選）七七才</li> <li>●太田虫生線愛宕トンネル一二間開通。この頃、畑山にてトーカー（発声映画）上映</li> <li>●県道出石福知山線（出合市場小谷茶屋）出石宮津線（出合市場南尾橋詰）間延長一六〇四間巾二間三三〇八坪供用廢止村道とす</li> <li>●高橋村「郷土読本」完成（孔版半紙全面六五枚綴）筆者中島太郎右衛門</li> <li>●この頃より生活改善のため資母秋まつりを一〇月一五日に統一す</li> <li>●合橋村庁舎改築七〇〇〇円谷垣組請負</li> <li>●仮庁舎矢根小学校に移転</li> </ul>
一九三二	六	<ul style="list-style-type: none"> <li>●五月一四日同二八日の二回字保谷を中心とし地鳴を伴う急激な地震あり神戸測候所長より県知事あて今後の注意方報告し、その回報を接受す</li> </ul>
一九三三	七	<ul style="list-style-type: none"> <li>●八月</li> </ul>
一九三三	八	<ul style="list-style-type: none"> <li>●八月</li> </ul>

一九三四	九	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 久畑にて京都府天田郡雲原村長西原亀三の経済更生講演会</li> <li>● 一〇月北陸地方陸軍大演習に天皇陛下行幸を小学六年以上、公民学校生徒、在郷軍人青年会婦人会三〇〇名、中舞鶴に奉迎す</li> <li>● 六月合橋村庁舎出合市場に竣工（合併後、本庁別館とし移築す）</li> <li>● 六月貴族院請願委員長伯爵清閑寺経房他旧華族四名来村、渋谷喜兵衛宅泊 村長団体長地方事情陳情す</li> <li>● 九月東北大学法文学部教授法学博士橋本文雄（中山）仙台にて死す三三才</li> <li>● 七〇年来の大積雪二尺以上のため休校</li> </ul>
一九三五	一〇	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 合橋村財政歳入五八千円歳出五四千円残四千元</li> <li>● 高橋村財政歳入三六千円歳出三六千円残〇</li> <li>● 「資母村誌」(菊判三六六頁) 配本一、〇〇〇冊・村内定価一円。村外一円五〇銭</li> <li>● 資母尋常高等小学校第一期工事完工費四七、四七〇円四七銭</li> <li>● 資母村財政歳入六九千円歳出六七千円残二千元</li> </ul>
一九三六	一一	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 四月高橋村経済更生村民大会</li> <li>● 八月電灯工事完成 郵便局「朝日」「毎日」の映画上映(注 高橋村)</li> <li>● 資母校第二期工事完工</li> <li>● 新嘗祭に宮中献納精粟、渋谷喜兵衛奉仕・三輪自動車ポンプ日本式五〇馬力購入三五〇〇円团长橋本一夫</li> </ul>
一九三七	一二	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 廃止県道福知山線を出合市場小谷線に、同宮津線を南尾三原線に合橋村道認定</li> <li>● 一二月合橋診療所設置条例を定む</li> </ul>
一九四〇	一五	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 平田校庭に二宮金次郎銅像除幕式</li> <li>● 皇紀二六〇〇年式県社参拝浦安の舞奉納・齊主大橋礼吉(昭和三四年歿八三才)</li> <li>● 資母村経済更生計画着手</li> </ul>
一九四一	一六	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 日本ペイント社長小畑源之助育英資金一万円を村に寄付 同誕生地に記念碑建立</li> <li>● 高橋村一二月戦勝祈願祭県社参拝 戦勝祈願必勝村民大会も開く</li> <li>● 資母村経済更生村民大会</li> <li>● 同村教育会「恒良親王御事蹟」発刊 小冊子一四頁</li> </ul>

年	昭和一七
一九四二	中山城山サイレン設備完工時報二回 資母村の五人以上育成した母親五五人と一〇組以上結婚斡旋者一七人県知事より表彰。
一九四三	二人以上戦死者家庭小畑定造（口藤）を知事表彰顕彰牌授章 中山字後山に防空監視哨設置、旧三村警防団員数名交替勤務し終戦に至る。 三月合橋青年学校廃止 九月森宮吉二宮金次郎銅像を合橋国民学校に寄付 監視哨長加藤敬二
一九四四	高橋村を農林省指令一八農政第一七八七一号にて昭和一八年度標準農村として指定す九月二七日農林大臣山崎達之輔より発令 二月出石郡東部（三村）青年学校組合会議。この年合橋女子勤勞挺身隊一人神戸製鋼二人日本国際航空神崎製作所へ勤務 資母村農業会発会式記念講演に代議士芦田均（のち首相）来村
一九四五	今井甚兵衛（在止）藍授褒章を受く 二月大雪のため役場倒壊し、仮庁舎を資母小学校に置き昭和二四年に至る 資母村財政歳入一六千円歳出一五七千円残四千円 高橋村財政歳入一五八千円歳出一三六千円残二千円 合橋村財政歳入一四九千円歳出一二〇千円残二千九百円 五月合橋村国民義勇隊結成式 七月三〇日敵機一〇来襲出石郡上空通過被害なし 一月高橋・資母の神戸市疎開児童帰神
一九四六	G H Q天然資源局組織部長米国コーネル大学教授高橋来村
一九四七	公選合橋村長南田義亮就任昭和三〇年に至る 高橋村公益質屋創設 責任者浅田太左衛門 公選高橋村長西本高志就任合併に至る 公選資母村長渋谷信二郎就任
一九四九	九月青年団体体育大会参加途中、佐田にて自動車事故死傷者多数 七月高橋村青年社会学舎を久畑校内に開設し青年男女学習す 資母村役場新築（合併以後支所にも使用後、昭和四七年売却処分）



一九五〇	二五	<ul style="list-style-type: none"> <li>合橋村財政歳入七八〇一千円歳出六九八一千円残八二〇千円</li> <li>一月「合橋村弘報」創刊新聞半頁判月刊毎戸配付三村合併まで続刊</li> <li>全但バス出合市場河本間開通・大石武兵衛(合橋村長三選)死す六七才</li> <li>高橋村財政歳入五七二四千円歳出五七七千円残五四七千円</li> <li>資母村財政歳入八二八三千円歳出七六八七千円残五九六千円</li> <li>二月「資母村弘報」創刊新聞半頁判月刊毎戸配付合併まで七三号終刊</li> <li>矢根―奥矢根―神美村口小野間村道一月県告示二五号にて県道編入さる</li> <li>出石川上流(百合―出合)を国の中小河川指定編入運動す</li> <li>高橋村消防自動車購入・消防用諸施設整備す団長田畑憲一</li> <li>四月小牧茂資母村長就任</li> <li>町営資母家庭学院を高校分校内に設置、洋裁を主とし毎週火金九時―一六時授業</li> <li>資母村結婚相談所開設、民生委員担当</li> <li>東大富永工学博士による出石川電源開発調査(出合ダム)論議を呼ぶ</li> <li>三月高橋村土地改良区設立一二日認可四月第一回總會四七三名中出席三一八名理事長西本高志地積二七〇町歩</li> <li>大正八年開通全但バス久畑終点を河野辺まで延長</li> <li>今井甚兵衛死す(村長三選)七五才</li> <li>全但バス岩屋終点を宮津駅延長</li> <li>高橋村電力導入費三六五万四〇三七円</li> <li>資母校の二宮金次郎銅像戦時金属供出のところで再建寄付渡辺福一郎(中山出身岡山)</li> <li>全但バス中山菅谷開通</li> </ul>
一九五二	二七	<ul style="list-style-type: none"> <li>合橋中学校全工事概算二、四八一万二千円収支不足五四三万五千円公表</li> <li>一二月徳島大学長医学博士中田篤郎(唐川)徳島にて死す六八才</li> <li>登尾峠改良測量A線B線四〇日間着手</li> <li>宮嶋藤一合橋村長就任合併に至る。(合併し町長職務執行者就任)</li> <li>高橋村児童よりぼたる二〇〇〇匹を神戸市立荒田小学校に贈呈</li> </ul>
一九五三	二八	<ul style="list-style-type: none"> <li>資母校の二宮金次郎銅像戦時金属供出のところで再建寄付渡辺福一郎(中山出身岡山)</li> <li>全但バス中山菅谷開通</li> </ul>
一九五四	二九	<ul style="list-style-type: none"> <li>合橋中学校全工事概算二、四八一万二千円収支不足五四三万五千円公表</li> <li>一二月徳島大学長医学博士中田篤郎(唐川)徳島にて死す六八才</li> <li>登尾峠改良測量A線B線四〇日間着手</li> <li>宮嶋藤一合橋村長就任合併に至る。(合併し町長職務執行者就任)</li> <li>高橋村児童よりぼたる二〇〇〇匹を神戸市立荒田小学校に贈呈</li> </ul>
一九五五	三〇	<ul style="list-style-type: none"> <li>高橋村児童よりぼたる二〇〇〇匹を神戸市立荒田小学校に贈呈</li> </ul>

五、主要文献目録

一九五六	昭和三一	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今井敏郎資母村長就任合併に至る</li> <li>・七月中山・坂野にてテレビを試写す</li> <li>・合併時井上律郎合橋村会議長(定員一六人)</li> <li>・天谷峠県道改良(一部福知山自衛隊施工)バス開通し翌年末中丹バスと協定相互乗降三三年末上夜久野駅に延長</li> <li>・合併時道下昌吉高橋村会議長(定員一六人)</li> <li>・合併時永井加多次資母村会議長(定員一六人)</li> <li>・九月一五日三村議会、合併を同時議決し但東町となる。</li> </ul>

古代史

井上光貞著「日本古代国家の研究」昭和四三年五月

月岩波書店

村井康彦著「古代国家解体過程の研究」(第二部

荘園成立史)昭和四〇年四月岩波書店

「日本歴史」(古代I)旧石器時代、縄文文化論、

古墳文化の形成 昭和四六年五月岩波書店

水野祐著「古代の出雲」昭和四七年五月吉川弘文

館

田名綱宏著「古代の交通」昭和四七年一〇月全

岡光夫著「村落産業の史的構造」昭和四二年一一

月新生社

遠藤元男著「産業近代史」昭和四四年七月雄山閣

落合重信著「条理制」昭和四七年一〇月全

豊田武編「産業史」(体系的日本史双書)I昭和

三九年一二月

中村吉治編「社会史」II全右

児玉幸多著「産業史」IIIII全右

直木孝次郎「古代国家の成立」昭和四〇年四月中央

公論社

井上光貞著「神話から歴史」昭和四〇年二月

原田敏明著「古代日本の信仰と社会」昭和三三年

一〇月新考書院

直木孝次郎著「日本の歴史」工倭国の誕生一四五

頁以下小学館版

岩村忍著「歴史とは何か」昭和四七年一—一月中旬

新書

末永雅雄著「古墳」昭和四五年一—二月学生社

宮坂英才著「尖石」昭和四三年五月全右

酒詰伸男著「貝塚に学ぶ」昭和四五年一—二月全右

藤森栄一著「石器と土器の話」昭和四六年四月全

右

小林行雄著「古鏡」昭和四六年四月

斎藤忠著「日本古代遺跡の研究」(総説)昭和四

五年七月吉川弘文館

村上直著「天領」昭和四〇年五月人物往来社

坪井清足編「古代の日本」(近畿(五))昭和四五年

本庄栄治郎黒正巖共著「日本経済史」昭和八年日本

評論社

長谷川謙治前田利光著「日本経済史」昭和四一年

五月広文社

山尾幸久「魏志倭人伝」月刊歴史と旅昭和五〇年

五月(邪馬台国大論争号)九二頁以下

原島礼二「横穴墓と古代有力氏族」月刊歴史読本

(横穴墓と古代国家の謎特輯号)一四六頁

石母田正著「古代日本の村落社会」昭和三七年四月

八幡一郎著「日本文化のあけぼの」昭和四七年一

〇月

八幡一郎著「金石併用文化と銅鐸」昭和四七年一

〇月

直良信夫著「古代人の生活」昭和四七年六月

桜井勉編「校補但馬考」大正一一年私立但馬教育

連合会「兵庫県史」第一、二卷昭和五一年兵庫県

中世史

石井進著「鎌倉幕府」(日本の歴史) 昭和四〇年  
八月中央公論社

奥仲辰治郎著「三河内史集」 昭和三三年一〇月

窪田五郎著「日本牛史」 昭和一五年三月子安農園

出版部

兒玉幸多著「産業史」(Ⅱ) 昭和三九年一二月

宮出秀雄著「藤沢誌考」 昭和三二年

石田松藏著「但馬史」Ⅰ・Ⅱ 昭和四八年  
神戸新聞社

近世史

古島敏雄著「産業史」(Ⅲ) 昭和三九年一二月

中村吉治著「近世初期農政史研究」 昭和一三年一

○月岩波書店

「近代日本總合年表」 昭和四三年一月岩波書店

石田松藏著「但馬史」Ⅲ 昭和五一年神戸新聞社

「資母村誌」 昭和九年資母村

「丹後地方の鉄文化について」 松田啓三郎(奥丹

後地方史研究) 一九七三・二・一〇創刊号一〇頁

竹野郡役所編「丹後国竹野郡誌」 大正四年一二月

広戸正藏編「木戸松菊公遺芳集」 昭和九年

八木康政著「丹後ちりめん物語」 昭和四五年三月

井上正一著「丹後網野の方言」 昭和三九年三月

峰山町研究会「郷土民謡選集」 昭和四四年八月

岩崎英精著「丹後機業の歴史」 昭和二八年六月

足立政男著「丹後機業史」 昭和三八年一〇月

現代(一)

兵庫県「出石郡役所事績」 昭和二年

郡是製絲編「三丹蚕業郷土史」 昭和八年八月

◇ 「郡是四〇年小史」 昭和一一年五月

宮出秀雄「日本製糸マニユファクチュアールの先駆

的萌芽」(社会経済史学) 一一卷五号

宮出秀雄「生糸改会社」(社会経済史学) 一一卷

一二号

古島敏雄著「産業史」(Ⅲ) 昭和三九年一二月

「日本産業百年史」上・下日本経済新聞社

高橋亀吉「明治大正農村經濟の変遷」

土屋喬雄著「続日本經濟史概要」昭和一四年九月

岩波書店

「兎山 櫻井勉米寿賀集」編さん發起人昭和六年

一月出石印刷所・櫻井勉「出石經濟論」

「神美村誌」昭和三二年

宮出秀雄「電力の農村工業に及ぼせる影響」(「

農業と經濟」)昭和一二四年四月号

宮出秀雄「七七禁令の農村工業に及ぼせる影響」

(「農村工業」)昭和一六年八月号

## 現代 (二)

財団法人文化財建造物保存技術協會編「重要文化

財日出神社本殿修理工事報告書」昭和四九年一一月

財団法人兵庫県神職會編「兵庫県神社誌」下巻昭

和一三年五月

「宮津誌」

付録 文 献  
「岩屋村誌」

「四辻史誌」

「三河村史話」

「福知山鐵道管理局史」昭和四八年

「出石雜誌」(明治三二年)一號—四號

宮出秀雄「出石町開發計畫」昭和三六年出石町

同右「但東町産業振興調査書」昭和三四年但東町

「八鹿町史」昭和四八年

「京都府百年の資料」産業編 昭和四七年

岡本久彦編「出石郡人物誌」昭和三四年出石町

「戦後日本資本主義年表」(資本主義講座別卷)

昭和二九年三月岩波書店

小林良彰著「昭和經濟史」昭和五〇年四月ソーテ

ック社

「兵庫縣市町村合併史」上・下昭和三七年兵庫縣

「滿洲開拓史」同史刊行會昭和四一年

有沢広巳「日本産業史」昭和四七年

その他。

## あ と が き

—経過・おわび・お礼—

昭和四七年五月、田畑町長から「町制二〇年に町史をこしらえたい」といわれ、企画を依頼された。以来半年間、但馬一市一八町丹後一市一〇町、丹波は夜久野町大江町福知山市にゆき、宮津の岩崎英精氏も訪問し、町史の現況を調査してそのまとめを「但東町誌史への一考察」とし四八年一月町へ提出した。区長会にもアンケートを依頼し、ごく少数の識者に「町史編纂につき意見を聞く会」を開いてもらった。五月、町の準備もとのい人選も終り委員会を開く段取りになり、以後のあらまはつぎのとおりであった。

第一回 四八年六月 親しみよい、わかりやすい、独創的なものを作ろうと決定。

第二回 四八年七月 三村の年表を作る。「資母村誌」を参考に総目次案作成。

第三回 四八年一〇月 進行協議 調査分担協議。

第四回 四八年十一月 執筆進行状況協議。

第五回 四九年一月 執筆進行余り進まず、二〇周年記念までの出版危ぶまれる。

第六回 四九年二月 宮出委員に総合執筆を依頼することを決定。

第七回 四九年三月 宮出委員起稿の第一次粗目案について協議。

第八回 四九年四月 宮出委員から「各自が最も得意な項目を何枚でも書く」ことを提言する。

第九回 四九年八月 五委員による原稿一一三六枚を回覧し意見交換調整。

第一〇回五〇年四月 田畑町長より全一卷とし、明年九月出版目標で進行を重ねて要望あり。

第一一回五〇年八月 福田町長就任初の委員会（宮出原稿、京極原稿等回覧）

第一二回五〇年一月 宮出委員起稿の第三次目次案を中心に協議意見交換。

以後、会議としては開かれていないが各委員に文書・電話・伝言により連絡を行い、わざわざたずねて下さる方々には、その都度進行現況を説明しご協力をおねがいした。印刷契約は二月に町と北星社で行われた。

いま第三回の校正を終って四年間をふりかえると、①できるだけ三村の均衡をとろうとしたが資料がなかった②中世史につき矢野宗深氏の研究が入らなかったのは残念だった。しかし同氏「亀ヶ城」△教委▽「但馬の城」△但馬文化協会▽を発表されているので止むをえなかった③京極氏近世後期の原稿通計一一〇〇枚全部を入れると町史が一、二〇〇頁になるので、一〇〇〇頁にまとめるには多数カットしなければならなかった④杉山石坪両氏の大変克明な原稿も全部は入らなかったが、残された原稿の内容は宮出先生に集約していただいた⑤浅沼多根両氏からはその都度有益な資料と助言をいただいた⑥東井先生は全国を講演旅行され、月に二、三日も在宅されないご多忙のところ貴重な資料と助言をいただいた⑦宮出先生には総合執筆のお立場で会議のたびに熱海から帰っていただき、調査・執筆・助言に懇切なご指導をいただき、とくに最終二回の会議後は出合センターで徹夜にちかい作業をして下さったことを忘れられない。町史が完成したのはひとえに、宮出先生の愛郷心と博覧強記の篤学と精力的執筆とによるものにはかならない。

またここには書ききれない多くの方々への協力をいただいた。一々そのお名前は省略させていただくが、至らなかつた諸点をおわびし、間違いの多くないのを念願し、つつしんでお礼申しあげます。

昭和五一年盛夏

山本梅治

但東町史編纂委員名簿 (昭和四八年六月一六日委嘱・同五一年九月三〇日迄)

氏名	出身	生	主な略歴と現職 (昭和五一年七月末現在五〇音順)
浅沼利夫	矢根	明治四二年	合橋小学校校長後町社教主事 現選挙管理委員会委員長 英語学研究
石坪広一	佐田	明治四二年	久畑郵便局勤務四〇余年 町文化財調査委員 人権擁護委員ほか
喜極憲州	岩滝町	明治四四年	昭和一五年金藏寺住職 小学校教職三〇年 町社教主事文化財調査委員
杉山政之助	大河内	明治四〇年	現役兵応召兵として北支(中国)従軍数年 町農業委員「赤松氏」の研究者
多根外朗	佐々木	大正三年	旧制豊岡中学卒 区長会長 町議会議員 町監査委員ほか
東井義雄	佐々木	明治四五年	八鹿小学校校長後現姫路学院女子短大講師「東井義雄著作集」全一〇巻
宮出秀雄	中山	明治四二年	東海大学教授「日本農業の経営経済学的研究」で学位 著書二五巻熱海市
山本梅治	虫生	大正四年	役場勤務四〇年 現但馬史研究会理事・但馬文化協会常任理事など

・町史主管 総務課

前任課長 本田喜太郎 補佐 福田弘雄 係 植田政由  
 現任課長 水口惇一郎 補佐 塩川剛三 係 井地喜代志 山下しげ子



# 但 東 町 誌

## 但東町合併20周年記念

---

印 刷 昭 和 5 1 年 1 0 月 1 日

発 行 昭 和 5 1 年 1 0 月 1 日

編 集 人 但 東 町 誌 編 さん 委 員 会

発 行 所 但 東 町 役 場  
兵 庫 県 出 石 郡 但 東 町 出 合 1 4 4

印 刷 所 北 星 社  
兵 庫 県 豊 岡 市 若 松 町 3 番 1 4 号

